

4 果 樹

項 目	作 業 内 容
<p>(1) 普通温州みかんの収穫</p> <p>(2) 越冬中晩柑類の防寒・低温・鳥害対策</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○普通温州みかんの収穫 ○越冬中晩柑類の防寒・低温・鳥害対策 ○伊予柑の収穫 ○越冬病虫害の防除 ○落葉果樹の基肥施用 <p>1か月予報では、気温がかなり高くなる見込みである(11月17日高松地方気象台発表)。しかし、予期せぬ寒波の襲来で、積雪や低温による大きな被害を受けることがあるため、気象情報をよく確認して作業を行う。</p> <p>12月は普通温州みかんの収穫最盛期である。果実分析、食味調査を行い、着色や糖度・クエン酸含量を確認してから分割採取する。成熟が早く、浮皮になりやすい外成り果や大玉果から先に採り、残した果実は着色状況などを見てから収穫する。腐敗果の発生防止のため、降雨等で果面が濡れている場合は採取を避ける。ハサミ傷を付けないよう果実は丁寧に扱い、鳥や害虫等による被害果の混入にも注意を払う。</p> <p>採取後は、着色向上と減酸、腐敗果発生防止等のため、風通しの良い場所で、果皮が弾力を持つ程度に、減量歩合2～3%(貯蔵する場合は3～5%)の予措を行う。</p> <p>越冬栽培を行う「不知火」「清見」「せとか」「甘平」などは、寒害と鳥害防止のために袋をかける(写真右)。袋の種類には紙製やサンテ等があり、紙袋は果実の保護に効果的だが手間がかかる。サンテは、省力的だが寒風や降雨による果皮障害の防止効果はない。目的や品種による使い分けが必要である。</p> <p>「せとか」では着色後、退色防止の黒サンテを用いるのが一般的である。「カラ」(南津海)のように果数が多い品種ではネット栽培により鳥害を回避する。</p> <div data-bbox="919 1451 1391 1816" data-label="Image"> </div> <p style="text-align: center;">写真 果実の袋がけ</p>

項 目	作 業 内 容									
<p>(3) 伊予柑の 収穫</p>	<p>寒風を防ぐため、防風垣や防風ネットを設置する。冷気のたまりやすい園地では、防風垣の下枝を処理して冷気を逃がす。</p> <p>冬季は乾燥しやすく、蒸散が盛んになると落葉が助長される。乾燥状態が長く続く場合には、晴れた暖かい日の午前中にかん水を行う。</p> <p>ア 適期収穫 12月中旬頃から始まる伊予柑の収穫は、果実が完全に着色してから行い、着色の早い外成り果から分割採取する。着色の遅い内成り果は1月上～中旬頃まで樹に成らせておき、果実品質の向上を図る。収穫後は園地ごとに着色・階級別（小玉・大玉別）に選果し、貯蔵する。また、3L以上の大玉果はス上がり果である恐れがあり、区分採取・貯蔵のうえ早期出荷とする。</p> <p>イ 果皮障害の発生防止 収穫直前期は、降雨後の寒風で果皮障害が発生していないかよく確かめる。気象情報に留意し、過去に果皮障害が発生した園地では、寒風が吹く前に、樹冠外周部の着色良好な果実を先に採取する。被害を受けた果実は、貯蔵性に劣るため区分して貯蔵する。</p> <p>ウ 予措 分割採取した果実は予措を行い、出荷時期に応じて貯蔵する。貯蔵庫内が過湿にならないよう入庫量（床面 1 m²当たり 250～300 kg）を守る。また、朝夕の換気に気を付け、10～12℃で管理する（表1）。</p> <p>表1 伊予柑の予措・貯蔵管理</p> <table border="1" data-bbox="475 1518 1388 1892"> <thead> <tr> <th>出荷時期</th> <th>予 措</th> <th>貯 蔵</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1～2月</td> <td>日 数：15日間 温 度：10～12℃ 湿 度：85%以下 減量歩合：3～5%</td> <td>温 度：8～9℃ 湿 度：85%程度</td> </tr> <tr> <td>3月</td> <td>日 数：20日間 温 度：10℃ 湿 度：80%以下 減量歩合：5%</td> <td>温 度：6～8℃ 湿 度：80～85%以下</td> </tr> </tbody> </table>	出荷時期	予 措	貯 蔵	1～2月	日 数：15日間 温 度：10～12℃ 湿 度：85%以下 減量歩合：3～5%	温 度：8～9℃ 湿 度：85%程度	3月	日 数：20日間 温 度：10℃ 湿 度：80%以下 減量歩合：5%	温 度：6～8℃ 湿 度：80～85%以下
出荷時期	予 措	貯 蔵								
1～2月	日 数：15日間 温 度：10～12℃ 湿 度：85%以下 減量歩合：3～5%	温 度：8～9℃ 湿 度：85%程度								
3月	日 数：20日間 温 度：10℃ 湿 度：80%以下 減量歩合：5%	温 度：6～8℃ 湿 度：80～85%以下								

項 目	作 業 内 容																																							
(4) 越冬病害虫の防除	<p>かんきつ類の越冬病害虫を防除するため、95%マシン油乳剤を散布する。冬季のマシン油乳剤散布はカイガラムシ類だけでなくミカンハダニにも効果的であり、また春以降の発生を少なくすることができる。</p> <p>散布時期は、温州みかんでは収穫後1週間程度経過した12月中旬～1月、収穫の遅い中晩柑類では2月下旬～3月中旬、落葉果樹では落葉後から厳寒期までとし、使用基準を順守する。落葉果樹での対越冬害虫薬剤は、マシン油乳剤と石灰硫黄合剤が中心である。石灰硫黄合剤は、もも縮葉病などの病害に効果がある一方で、カイガラムシ類へは効果が低い。そのためカイガラムシ類が発生するもも園では、マシン油乳剤を散布してから1か月以上空けて石灰硫黄合剤を散布する。散布ムラのないよう丁寧に、風の弱い温暖な日を選定する。</p>																																							
(5) 落葉果樹の基肥施用	<p>基肥は、来春の新梢伸長や開花結実、果実の初期肥大促進のために欠かせないものである。次年度の生産性を高めるため、表2を参照に施肥を行う。</p> <p>表2 落葉果樹の基肥施用基準</p> <table border="1" data-bbox="485 1182 1402 1619"> <thead> <tr> <th rowspan="2">樹 種 名</th> <th rowspan="2">目標収量 (t/10 a)</th> <th rowspan="2">施肥時期</th> <th colspan="3">施肥成分量(kg/10 a)</th> </tr> <tr> <th>チッ素</th> <th>リン酸</th> <th>カリ</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>かき</td> <td>3.0</td> <td>12月中旬</td> <td>12</td> <td>9</td> <td>8</td> </tr> <tr> <td>くり</td> <td>0.4</td> <td>12月中旬</td> <td>12</td> <td>8</td> <td>8</td> </tr> <tr> <td>なし</td> <td>3.0</td> <td>12月中旬</td> <td>11</td> <td>8</td> <td>9</td> </tr> <tr> <td>いちじく (蓬萊柿)</td> <td>2.5</td> <td>12月下旬</td> <td>9</td> <td>16</td> <td>5</td> </tr> <tr> <td>いちじく (柘井ドーフィン)</td> <td>3.0</td> <td>12月下旬</td> <td>10</td> <td>12</td> <td>6</td> </tr> </tbody> </table>	樹 種 名	目標収量 (t/10 a)	施肥時期	施肥成分量(kg/10 a)			チッ素	リン酸	カリ	かき	3.0	12月中旬	12	9	8	くり	0.4	12月中旬	12	8	8	なし	3.0	12月中旬	11	8	9	いちじく (蓬萊柿)	2.5	12月下旬	9	16	5	いちじく (柘井ドーフィン)	3.0	12月下旬	10	12	6
樹 種 名	目標収量 (t/10 a)				施肥時期	施肥成分量(kg/10 a)																																		
		チッ素	リン酸	カリ																																				
かき	3.0	12月中旬	12	9	8																																			
くり	0.4	12月中旬	12	8	8																																			
なし	3.0	12月中旬	11	8	9																																			
いちじく (蓬萊柿)	2.5	12月下旬	9	16	5																																			
いちじく (柘井ドーフィン)	3.0	12月下旬	10	12	6																																			

(作成 果樹研究センター)